

『小樽商科大学百年史』を読んで

天 野 郁 夫

大学一般の歴史を扱う「大学史」と紛らわしいので、ここでは個別大学の歴史を「校史」と呼ぶことにしたい。

それぞれの大学の編纂する、その「校史」を集め始めてから、もう40年近くになるだろうか。きっかけは、当時私が在職していた国立教育研究所の「日本近代教育百年史」の編纂事業に、執筆者の一員として参加する機会を与えられたことにある。分担することになったのは、高等教育の部分で、この部分は、政策や制度を取り上げる総論的な章の他、大学予備教育・大学・専門学校の3つの章に分かれており、私が命じられたのは、「専門学校」の部分の執筆であった。

ご承知のように、戦前期の高等教育システムは、大学・高等学校・専門学校・師範学校など、多様な学校群から編成されていた。さらに言えば、大学は帝国大学・官立大学・公立大学に、専門学校は専門学校と実業専門学校に、師範学校も高等師範学校と師範学校にそれぞれ分かれていた。高等学校も、単独の高等学校と大学に付設された、それと同一基準による大学予科に分かれていたとみるべきだろう。大学予備教育という呼び方は、その表れに他ならない。

これら多様な学校群の中で、学校数の上でも、また在学者数でも、多数を占めたのは専門学校である。ところがその専門学校について、当時、まとまった研究はほとんどなかった。高等教育の歴史的な研究と云えば、「大学史」という言葉通り大学、それも帝国大学か、その実質的な予科である高等学校の研究がほとんどで、専門学校の対象にしたまとまった研究はないに等しかった。「専門学校」の、しかも明治初期から昭和戦前期までの通史を執筆するよう命じられて、途方に暮れる思いをしたのを覚えている。まして、私は教育史ではなく教育社会学の研究者で、所属も「教育計画」研究室だったのだから、いかに専門学校の研究が空白状態であったかがわかる。そうしたなかで、私が執筆者に選任されたのには、専門学校を対象を含む歴史的な研究論文をいくつか書いていたという、それなりの理由があった。しかしそれにしても、事実上、一から始めるに等しい状態であったことには変わりはない。その一から始めた作業のひとつが、個別の専門学校の校史の収集だった。

専門学校は様々な学校群から構成されていたが、中心は私立専門学校と官立実業専門学校の2大グループである。このうち、私立専門学校については、昭和40年代はじめの時点ですでに、かなりの数の校史が刊行されていた。慶応・早稲田をはじめ、私立の伝統校はほとんどが、大正7年の大学令まで、名前に「大学」を謳っていても、制度上は専門学校令に準拠する学校であったし、その後も専門学校相当の課程を「専門部」として残してきた。それだけでなく戦前期の私立大学も専門学校も、戦後はほぼそのまま「新制大学」に移行している。学校としての連続性、アイデンティティを保ったまま戦後に至り、そのア

イデンティティの表れとして、校史の編纂・刊行が早くから進められてきたのである。根気よく古本屋をめぐれば、かなりの数の校史を手に入れることが可能だった。

ところが、官立実業専門学校の場合にはそうはいかなかった。なにより校史自体が、存在しない学校がほとんどだったからである。最大の問題は、戦後の学制改革にあった。『小樽商科大学百年史』でも詳述されているように、高等教育の官立セクターの再編が、一県一大学を原則に、大学から高等学校・実業専門学校、さらには師範学校まで、県内の官立学校をすべて統合する形で「新制国立大学」が発足し、その一学部になってしまったからである。それは官立実業専門学校が、独立の学校史を編纂する機会を奪われただけでなく、社会的にも見えない存在になってしまったことを意味している。もちろん、戦前期に既に校史を刊行している学校もあれば、戦後に独立の校史・学部史を編纂した学校もある。しかし、小樽商科大学のように、単独で新制大学への昇格をはたし、しかも2度にわたって学校史を刊行することのできた実業専門学校は例外であり、高等商業学校の中ではただ一校だけであることを、指摘しておくべきだろう。結局、官立実業専門学校群については、『文部省年報』と、各学校の毎年度の『学校一覧』を頼りにするほかはなかった。

それはともかく、何とか分担部分を書き上げ、それをもとに1978年『旧制専門学校』（日経新書）というポピュラーブックを出したところ、官立実業専門学校卒業の読者から、よくぞ取り上げてくれたという趣旨の、好意的な手紙を何通もいただいたことを覚えている。卒業生たちの間に、戦後改革によって母校が失なわれたという思いが強かったことがわかる。（なお『日本近代百年史』の執筆部分は、他の論稿と合わせて『近代日本高等教育研究』（玉川大学出版部、1989年）として刊行されている）。

その後長い間、本業である教育社会学の方の仕事に時間を取られ、専門学校についても高等教育についても、まとまった歴史関連の論文や著書を書く機会はなかった。しかし、いったん始めた校史の収集の方は、いつか利用する機会があるだろうと、目についたら手に入れているうちに、気がついたら書架のかなりの部分を占めるようになっていた。旧制・新制を問わず、大学が次々に50年、100年という歴史の区切り目を迎え、続々と校史を刊行するようになったからである。校史のほとんどは良質の紙を使い、分厚く、何巻にもわたるものが少なくない。狭い書庫の棚を占領しているその校史の山を、活用しないまま研究者生活を終えるわけにはいかないではないか。定年退職後、改めて日本の高等教育史研究に、力を注ぐようになったのはそんな気持ちからである。

そうしたなか、『小樽商科大学百年史』が刊行され、贈呈にあずかり、私のコレクションに花を添えることになった。お世辞を言うつもりはないが、十本の指に入る力作とってよい。編纂にあたった方々の努力に、心より敬意を表したい。

話を高等商業学校に限れば、本格的な校史を持っているのは、東京・神戸・小樽、それに公立の大阪の4校だけである。このうち小樽を除く3高商は、いずれも戦前期に大学昇格を果たしている。ただ神戸と大阪は、戦後の学制改革の過程で他の学校と統合され総合大学になっている。立派な校史を持っているが、戦前期の高商時代はともかく、戦後の旧高商を引き継いだ部分については、記述が手薄になっているのは否めない。また東京高商・

東京商科大学は、戦後も単独で一橋大学に移行したものの、戦前期の『一橋五十年史』以降、本格的な校史を編纂・刊行するに至っていない。言いかえれば、戦前から戦後まで、かつての高等商業に端を発する経済学・経営学・商学の一貫した教育研究機関としての歴史を紡いでいるのは、『小樽商科大学百年史』のみということになる。その意味でも、今回の刊行の意義は大きい。

その小樽の『百年史』の重要な特徴は、なによりも目配りの良さ、バランスの良さにある。「通史」の部分は、一人の執筆者が担当したとのことだが、各時代を通してほぼ共通のトピックが扱われており、百年の変化を多様な側面から追うことが可能になっている。これまで多くの場合、校史は政策的・制度的・組織的な側面を中心に記述されてきた。教員の人事や教育、学生生活の実態、さらには地域社会とのかかわり等については、十分な取り上げ方がされて来たとはいえない。それに対して『小樽商科大学百年史』は、これらの問題にも大きな紙数を割いており、地域社会の中での「官立」高等商業学校の位置、そこでの「高商教育」や学生生活の具体的な姿と、その時代的な変遷を一貫してたどることができる。単独執筆の長所が、端的にしめされているといえるだろう。

それは、戦前・戦後を通じて単科の高等教育機関としてのアイデンティティを保ってきた、しかも戦火に会うことを免れ、豊富な資料を蓄積してきた小樽商科大学であればこそ、可能なことであったのかもしれない。しかし同時に、この『百年史』が、2011年という時点で刊行されたことにも留意する必要がある。世紀の変わり目をまたぐこの20年ほどの間に大学は、単純化していえば教員中心から学生中心へと、大きな転換を迫られてきた。社会（地域）貢献が、大学に期待される役割の一つとして重視されるようになったことも、付け加えておくべきかもしれない。校史の編纂は、過去を振り返るだけでなく未来への展望を切り開くための作業でもある。この『百年史』は、そうした変革の時代の要請を色濃く映しているとみるべきだろう。

未来への展望といえば、『百年史』は最後の部分で1990年代初めから始まり、2004年の法人化に至る「現在」にも目配りを忘れていない。歴史の記述にはドラマが欠かせない。創設時の苦闘から始まり、大正期の昇格運動、戦後の新制大学への移行、1960年代末の学園紛争と、これまでもさまざまなドラマがあった。学部教育の改革から法人化にいたる、現在なお進行中の変革はドラマ性に乏しいが、それらに匹敵する、あるいはそれ以上に大きな転換を大学にもたらしつつある。数十年後に編纂されることになるだろう、次の校史で、それはどのように記述されることになるのか。読む機会はもうないだろうが、興味は尽きない。

校史の編纂は、自校の大学としての個性を再確認するための作業といってよい。最近の私立大学の校史には、「建学の精神」の章や項を立てているものが少なくない。それが大学としての個性の淵源だからである。「官立」の諸学校に、「建学の精神」を求めるのは難しい。しかし、「官」立とはいいながら「民」の力を借りてすすめられた創設の経緯や、教員と学生が一体となって作り上げてきた「校風」という個性は、小樽の場合はもちろん、他の国立大学の場合にも、確かなものとして存在する。1990年代に入って言われてきた「大

学の個性化」とは、そうした大学としての個性の再確認を求めるものであり、校史の編纂はその重要な柱の一つとあってよいだろう。

大学の個性を確認し確立していくためには、そうした歴史の中で培われてきた「校風」を、教員も学生も繰り返し自覚化し、再構成し、再構築していく必要がある。文部科学省はいま、これまでの「個性化」に変えて、大学の「機能別分化」を高等教育政策の基本に据えようとしている。しかし機能は所詮、機能であり、大学の個性に置き換えられるものではなく、またそうされるべきものでもない。校史の効用はなによりも、文部科学省の期待する単なる機能を越えて、大学としてのアイデンティティを明確にし、個性を確認し、「校風」の再構築を進める契機と基盤を提供する所にあるのではないか。

最近、私立大学を中心に「自大学史」の授業を開設する大学が増えている。この浩瀚な『百年史』が、学生を含めてより多くの読者を持ち、小樽商科大学の「個性化」推進に役立てられることを期待したい。そのためにも、ハンディなダイジェスト版が作成されることが望まれる（すでに、そのための作業が進められているのかもしれない）。

(東京大学名誉教授)